

パリオリンピックの開会式で感じたこと

松浦 純子

早朝、短時間だったが、テレビでパリオリンピックの開会式を見た。フランスといえばやっぱり革命だ、と思った。国歌のラマルセイエーズ、オランプリッドルージュの像、処刑をイメージした赤い煙と斬首された女性。

ヨーロッパの大国で、イギリスは十七世紀の十一年間を除いて十一世紀後半から現在まで王政が続く、ドイツは十四世紀の大空位時代を除いて十世紀後半から十九世紀初めまで神聖ローマ皇帝による帝政が続いた。一方、フランスは十世紀末に王国が成立し途切れることなく十八世紀末まで王政が続いた。しかし、その後八十年足らずのうちに王政↓第一共和政↓第一帝政↓王政↓第二共和政↓第二帝政↓第三共和政と変わり、さらに第一帝政のところを詳しく見れば、帝政↓王政↓帝政となる。ナポレオンがエルバ島から脱出して再び皇帝の位に就いたので、ルイ十八世が慌てて王位を降りた時期である。フランス革命、七月革命、二月革命とヨーロッパ諸国の国王に脅威を与えた革命は、いずれも当時のブルボン朝とその傍系の国王が民衆を無視したことから引き起こされた。

パリには二六〇の男性の像があるが、女性は四〇だけ。そこで今回、フランス史を作った女性の像を新たに一〇体制作して、パリ市に寄贈する事になったという。この中で誰でも知っている名前はボーヴォワールぐらい。私が興味を持ったのは、オランプリッドルージュである。彼女はラファイエットが起草した「人間および市民の権利の宣言」、通称「人権宣言」に対抗し、その二年後に「女性および女性市民の権利の宣言」、通称「女性の権利宣言」を発表して男女の平等を訴えた。

しかし、彼女の主張は男性にも女性にも受け入れられず、また国王処刑を批判したことから王党派と思われ、マリアントワネットが処刑された翌月に、同じくジャコバン派のロベスピエールによってギロチンで処刑されてしまった。その後もフランスでは女性の権利はなかなか実現しなかった。